

校内別室指導支援員と連携した校内支援体制の強化について

不登校児童・生徒の状況

当該児童は、現在第5学年の生徒で、第3学年の時期から登校渋りが始まった。主たる要因としては、本人の聴覚過敏・偏食・過集中等による集団生活に対する苦痛である。第3学年の後半からは、連日遅刻・早退が続き、次第に不登校傾向が強くなった。

具体的な取組

落ち着いて学習できるよう、管理職が中心となり、養護教諭・特別支援教室担当教諭・SCが校内別室指導室を作り、校内別室指導支援員を配置した。名称を第2学習室とし、教室での学習を別室で静かに進められることを、本人・保護者へ伝え、登校を促した。

校内別室指導支援員は、担任・専科と連携し、学級での授業の内容を個別指導したり、教室とオンラインでつなげて学習を促したりすることができた。また、別室で理科の実験や図画工作の作品制作の指導を行えるようにしたり、休憩できる椅子を用意したりするなど環境を整えた。

担任と校内別室指導支援員が、記録ノートを活用して、毎日児童の学習への取組や学校生活での友達との関わりなどの様子を保護者に伝えるなど保護者との関わりを密にした。保護者も児童の状況を細かく共有ようになり、本人の状況がよく分かり、より効果的なアドバイスができるようになった。登校への安心感が高まっていった。

目に映る情報を極力少なくし、自分の学習に集中できる環境



成果

9月は欠席5日、遅刻・早退は徐々に改善している。2学期からは学習活動を事前に伝えると、2～3時間を教室で学習することができる日が増えた。10月後半からは、終日学級で過ごす日も見られた。不登校傾向や集団生活の不安が改善されてきた。

課題

進級したり、担任が変わったりなど、環境が変化した時に、今と同様に安心して学習活動ができるように支援が必要である。

校内別室指導支援員を活用した本校の取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、人の多いところを苦手としており、小学校から不登校が続いている。将来の夢に向かい学習する意欲もあるので、教室で授業を受けようとするが、心理的負担が大きく難しい状況であった。そのため、教室や校内別室で学習をする時期または、自宅にてオンライン授業を受けて学習する時期を繰り返してきた。

具体的な取組

【登校支援委員会の設置及び登校支援会議の実施】

毎週登校支援委員会（各学年の不登校担当・養護教諭・SC・SSW・校内別室指導支援員）を開き、当該生徒の情報を共有して、支援・指導方針を決定している。

また、会議録を校内の全教員が閲覧できるようにし、共通理解を図っている。

【生徒の居場所作り】

教室に入ることに抵抗感がある生徒の学びを支援し、生活リズムを保つことができるように、自習できる別室を用意している。可動式のパーティションも用意して、必要に応じて使用できるよう準備している。

今年度は、校内別室指導支援員がこの部屋での学習を見守っている。

【ICTを活用した取組】

学習者用タブレット端末を使用して、週に1度オンラインで面談をしている。また、自宅でも校内別室でも、授業配信を通して学ぶことができる。各教科担当から宿題の連絡を受け取ることができる。宿題の内容によっては、タブレットでの提出も可能としてい



【全校体制での支援】

支援策の見直し・決定については、SC・SSWから専門的な助言を受けている。

当該生徒・保護者との面談には必要に応じて不登校対応加配教員または他の教員が加わることもある。

成果

当該生徒は、現在自宅で学習をしているが、別室での学習を再度希望すれば可能な状態である。これまで気持ちの変化に応じて様々な形態をとりながらも、学習意欲を保ち、学びを継続している。進路選択に関しても前向きに取り組んでいる。

課題

居場所作りや学習支援のため、別室利用のルールを見直して、生徒にとって校内別室をより利用しやすくすることが課題である。

本校の別室登校生徒について

不登校児童・生徒の状況

本校では、生活指導部会や特別支援教育校内委員会で不登校生徒の支援について検討してきた。これまでは、教室復帰の手だてとして、担任の家庭訪問や教育支援センターへの登校の促し等の支援をしていた。校内別室指導を開始し、教室に入れないう生徒が定期的に学校とつながりをもてるようになった。現在、定期的に校内別室を利用する生徒6名の学習指導等を行っている。

具体的な取組

中学校1年生の事例では、小学校6年生から不登校となり、当該生徒は、ASD傾向があり、中学校入学後、2週間程度で教室に入れなくなった。当該生徒は、学校に行きたいという気持ちがあり、週1回、別室登校を開始した。昼の時間は保健室で過ごしている。別室登校では、他の別室登校している生徒と友人関係を築くことができた。

中学校2年生の事例では、クラス替えをきっかけにして、新しい友人関係が築けず登校することができなくなった。別室登校をしながら、SCとの面談も実施した。徐々に授業へ参加できる日が増えてきている。登校できていることで教員との接点が増え、関わりももちやすくなり、学校生活について前向きな発言が聞かれるようになった。

中学校3年生の事例では、中学校入学後から不登校になった。SCとの面談を続ける過程で、登校への意欲が出てきたため、別室登校を開始した。

別室登校を段階的に続けたことで、学校に滞在できる時間が伸びてきている。

また、学校の行事にも参加しようという意識が出てきている。

別室登校では、学習や支援員を交えて、談話をして息抜きをしている様子である。



成果

校内別室の取組により、不登校にならずに生徒が学校に登校できている。

今までは教室に入れないう生徒が保健室で過ごす時間が増え、保健室の業務に影響が出ていたが、校内別室ができたことで、保健室以外で対応できるようになった。

課題

校内別室指導支援員の人材を確保すること。

また、学習や教室復帰への意欲を継続させる関わり方が課題である。